

第3回 心肺蘇生・AED授業セット開発委員会・WG 議事録

1. 日時

令和元年8月10日(土) 10:00~17:00

2. 場所

アルカディア市ヶ谷 私学会館

3. 出席者(敬称略)

委員長	石見拓
WG長	立川法正
WGメンバー	野津有司、岡野正人、岸平直子、黒岩保宏、白川和宏、名知祥、西山知佳、平館宏美、本間洋輔
オブザーバー	坂本哲也、村井伸子、矢崎良明
事務局	小林広樹、小葉友香

4. 議事・案(敬称略)

1) 冒頭の挨拶より

- ・ 教材教具の作成は、指導案の骨格が出来れば可能となる。発達状態に応じた考え方の大枠を本日作り終えることが目標(小林)
- ・ 本日は、全員が納得できる内容を話し合い作成していく(石見)
- ・ 指導案を作成するための考え方を共有し、次回のWGまでに小・中・高の指導案が完成できるように本日纏めたベースを基に今後推敲を重ねていく(立川)

2) 野津先生 教材開発に向けた指導案・案

- ・ブレインストーミング：正解・事実と思う範囲で考えるのではなく、突拍子もないことを含めてあらゆるアイデア・思い付きを出し合うもの
- ・学習指導案では、心肺蘇生AED教育で育成を目指す資質能力の明文化を行う

【子どもにできる救命活動シリーズの子供用の教材開発】

バージョン1(小学生用) 関わる勇気をもとう

- 1 導入：寸劇・ロールプレイング又は動画上映
- 2 展開：関わりにくい自分に気づく。勇気をもてるように、デモンストレーションにより救命活動の実際をしる
- 3 まとめ：保健室で追加実習や中学校の学習への意欲化

バージョン2(中学生用) やってみよう胸骨あっぱくとAED

- 1 自分一人しかいない場面での家族又は友人に対する救命のケーススタディ
- 2 実習を通じた技能の合理性の理解と手順・方法の練習(探究的発問の工夫がポイント)

バージョン3（高等学校）協力しよう、救命活動！

- 1 町中で見知らぬ人に囲まれた中での活動のプレッシャー
- 2 複数の人との役割分担の在り方と進め方
- 3 人工呼吸の技能の理解

教員研修プログラムの開発と開催計画

- 1 受講意欲の喚起とアイスブレイクのための教材開発
 - 救命に関するタイムライン資料の作成
 - 心肺蘇生・AEDに関するドミノクイズカードの作成
- 2 冊子「指導マニュアル」の作成
 - チーム学校で支える
 - 管理職者 一般教員 保健（体育）主事 養護教諭 栄養教諭 SC SSW 学校医 学校歯科医 学校薬剤師 保護者 地域の人々 保健所・保健センター等の関係機関

3) 全体ディスカッション

- ・ 事前課題の指導案を基に各位5分程度で発表

立川

対象：小学校第6学年

理由：理科で心臓の動き、人の体の作りと働きを学ぶため

導入：道端でひとが倒れるシーンについて何が原因かを考える

- 道端で心臓が止まったひとにどうするかを考える

展開：

- ・ 早く処置をしなければいけないことを伝えたい
 - 救命曲線から、短時間で処置をすることの必要性を伝える
 - 心臓が停止すると頭に血液が行かなくなり、反応がなくなることを伝える
- ・ 肩をきながら声を掛けられるか？という問いかけについて。
 - 学校では不審者教育において知らないひとに声をかけないように教えているため、声をかけられないという意見も出ると予想。
 - 勇気を出して行動することを教える。できないときは、近くにいる大人を大声で呼ぶ。

岸平

対象：小学校第5学年

制作：

- ・ 3種（体育1種、学級活動2種）制作
- ・ 体育：保健領域にてけがの防止（通常4時間）に1時間を追加
 - 目標：
 - ・ 心肺蘇生法とAEDについて理解すること。
 - ・ 命がかげがえのないものであることを確認し自他の命の尊厳を学ぶ
 - 授業時間：45分

- 導入：
 - ・ 映像：昼休み時間に友達の胸にボールが当たったシーン及び心室細動の状態になっている部分を映像にて説明する
 - ・ ワークシート：救命曲線や救急車到着時間を基に友達が助かる時間を考える
- 実技：
 - ・ 指導者がデモンストレーションを行う
 - ・ クイズ形式等を取り入れる
- ・ 学級活動：
 - 道徳との関連性を持たせる
 - ・ 東京書籍 5年生で「お父さんは救急救命士」というお話が教科書に載っている
 - 体育との関連性を持たせる
 - ・ 5年生でけがの防止を学ぶ

小学校指導案（製作者：立川・岸平・濱田）についての質疑応答

- ・ 実習を行うかどうかの問題となる（立川）
 - 具体的な方針の前にコンピテンシーを明確にする必要がある（坂本）
 - 実習の目的が興味を持ってもらうことなのか？技術が身に付くことなのか？気づきがあればよいのか？自分で声をかければよいのか？等、コンセプトを明確にしたうえで実習の必要可否を決めたほうが良い
 - 子どもの頃から必要なものとしてモチベーションを身に付けさせたい。（名知）
 - 小学生自身が完全に動けるまでいなくても、声をかけて確認をしてという行動が出来ることが重要。
 - 実習の必要性は感じるが、授業のコマ数に限界があるため、色々なパターンを制作し、代表的な形に整理していく。
 - 子ども用PUSHコースは安全の確認と大人を呼ぶことが重要となっている。（立川）
 - 第一発見と大人を呼ぶまでの行動が小学校の内容だと考える。
- ・ 坂本先生がおっしゃられたようにゴール設定を先に決めるべきである。（石見）
 - 緑のファイル資料欄にあるコンセンサスに（参考URL：https://jsem.me/about/school_bls/teaching_consensus2015_v160303.pdf）に到達目標が示されている（名知）
 - 以前の物なので、このまま活用できるかについては議論が必要である
 - 当初、低学年の到達目標と記載したものが小学校全体の目標になってきている
 - 小学校高学年で目標に掲げた実技については、現実的に全国で実施するには適していないと聞いた
 - コンセンサスは非常に医療者的な目標設定となっていた。教育者の目標設定を見るとコンセンサスとは異なる。（石見）
 - 教育のゴール設定を明確にすべきである。心肺蘇生がゴールではなく、あくまで自分たちに課題解決ができるかどうかを考えるべきである
 - 小学校低学年の指導案で思うことは、『自らの身を守ることを第一にする』というフレーズは学校で歓迎されるだろう（野津）
 - 『手技の質をあえて問わない』『協力して』は削除すべきである

- 助けた人を助ける重要性の理解は、小学生では難しく中学生・高校生と成長にしていくにつれ理解していく内容である。小・中・高、永遠のテーマになるので、重要性の理解という言葉は使わない方が良い。
 - ・ 『助けることが出来る』などの文言の方が良い
 - 目標を設定した際に、既存の教材教具をどのように位置づけて活用するかを明確にする必要がある
 - 勇気をもって行動をするということは目標の一つとなる。
 - ・ 勇気を出せない、勇気を持たないというのは何故なのかを考えることが学習内容となる
- ・ 何故なのかを考える授業は小学校で成り立つのか？（石見）
 - 自らの想いのため考えることが出来、様々な意見が出てくる。（野津）
 - 自分がやらなくても良い、知らない人に近づかないなど意見を想定しながら、どのように場面設定にリミテーションをかけていくかを考え指導案に示していく
（例）知っている人が倒れたとき、他に大人がいるとき、自分しかいない時、という流れで構成を行うなど
 - 思い通りに生徒が反応しない時の対策も考えておく
 - 重要性を理屈で理解させることは難しいが、人が亡くなることについて感情的に共感を得ることは可能でしょうか？（坂本）
 - 可能（野津）
 - 目標について、1つ明確に絞った方がよいでしょうか？（立川）
 - これくらいあった方が良い（石見）
 - ・ 小学校でも学年により発達段階に違いが出る。どの学年をターゲットにするかを考えてもよいのではないか？（西山）
 - 授業セットを作成するにあたっては、5年・6年がターゲットになる（名知）
 - 学習指導要領が3・4年、5・6年というくくりとなる。けがの防止は5・6年。学習指導要領上は6年で実施してもよいが、現実的には5年で行っている（野津）
 - ・ 小学校で協力が難しい理由はなんでしょうか？（石見）
 - 協力の要素が入ると他に色々な要素が入るため、高校生レベルであると考えられる（野津）
 - AHAの中でもチーム組織を1個の枠として展開している。チームとして動く様々な要素が入ってくるので小学生には難しいと思う。高校は逆にチームでいかに救命すべきかという点で展開すると人工呼吸を含むすべての救命が円滑に回ると考えられる（名知）
 - ・ チーム組織を上手く実行することは難しいが、大人に任せるといっても協力と考えられないか（石見）
 - 「協力して」と言われた際、大人に任せるととらえずに人間関係的な協力をするととらえられてしまう。人間関係的な協力をを行うのは高校生である。（野津）
 - みんなで出来ることをやり助けようという発想は良いが、それを指し協力といってしまうと意味が異なる。目標としては入れない方が良い（野津）

- ・ 役割分担についても入れない方が良いか？（石見）
 - どういうことが出来るか？という問いかけは良いが、それを目標とすると協力という課題が出来てしまうため避けるべきである。（野津）
 - ➔ 協力というプロセスは絶対的ではない。協力が絶対となると、一人しかいない時に救命が出来なくなってしまう。指導案等活字にする際は配慮が必要である。

- ・ 1時間の授業の目標は1時間で出来ることを目標とする。将来の願いのようなものは目標としてはならない（野津）
 - 「知識・理解」「思考・判断・表現」「関心・意欲・態度」についての目標を記載する。
 - 目標は2観点以上を持つ（1観点だけではいけない）
 - 観点別の目標を書くことが指導案の書き方
- ・ 授業の狙いを明確にする
 - 授業でいうまとめは、その日の授業の要点をまとめるのではなく、授業の狙いを先生が開示すること

岡野

対象：中学校 第2学年

単元名：障害の防止（応急手当の意義と基本）

内容：

- ・ 保健体育の保健分野に落とし込み位置づけた。
- ・ 8時間扱いの7，8時間目。
- ・ 7時間目で日常生活を送る怪我に手当、AEDについて学んだ後に、次の時間で実習。
- ・ 倒れたひとに何が出来るかを課題とし、こういうことをしたら良いのではないかというのを落としどころとした
- ・ さいたま市の流れが非常にわかりやすく参考とした。

白川

対象：中学校 第2学年

単元名：障害の防止（心肺停止の応急手当）

内容：

- ・ PUSHの流れを参考に指導案を作成。
- ・ メッセージビデオが動機づけとし有効である。
- ・ 心肺蘇生をする科学的根拠を明示する。

本間

対象：中学校 第2学年

単元名：障害の防止（心臓突然死の応急手当と自分たちが出来ること）

内容：

- ・ 保健体育に入るが何コマ使われているかわからなかったなので、心肺蘇生だけで4コマ使用
- ・ グループワークでアイデアを出し、事実を知り（発見）、実習を行う。
- ・ 心肺蘇生の流れを学んだ後、自らが出来ることを知る。

- AEDの使用率が5%というなら、使用率を上昇させるためにはどうすれば良いか？など中学生ならではの気づきが出るように学習を進める。

中学校指導案（製作者：岡野・黒岩・白川・本間）についての質疑応答

- ・ 基本的に胸骨圧迫とAEDのPUSHコースを行うイメージ（立川）
- ・ 学習指導要領にあるように岡野先生・黒岩先生のものがオーソドックスなものと考えてよいか？（石見）
 - 単元として大きな目標を達成するための1部として応急手当を位置づけるのがポイント（岡野）
 - ➔ 1つの授業として別時間を取るより、単元の流れに入れるほうが受け入れやすいのではないか
- ・ 一人一体の人形と模擬AED、DVDが流せる環境があれば約2コマあればAEDと胸骨圧迫を含めた教育が出来る（坂本）
- ・ 実際に有事の際に行動に移せる動機づけをどこまで含むのか。自助・共助の面をどこまで入れるのかによって内容が変わってくるのではないか？（坂本）
 - 精神的なもの（自助・共助）の部分は傷害の防止の8時間の所では難しい。（野津）
 - 時間が1コマか2コマかによっても変わってくる。（石見）
- ・ 50分単体で心肺蘇生やAEDについて指導することが出来るのか？理想は100分位欲しい（岡野）
 - 教科書が応急手当は2時間で行うようになっている（岸平）
- ・ 技能を身に着ける授業ということだけがうたわれている教科書はない（野津）
 - 出来ることを目指して教えるが、出来る・出来ないで評価せず、正しく理解できているか（方法手順等）。その理解を深めるために議論することが大切。
 - 協力し ⇒ メカニズムを理解する。協力という言葉は高校で使用する
- ・ 電気ショックと胸骨圧迫の役割を入れることが出来ればよいのではないか（石見）
 - 科学的にという意味では中学校でもやりうる内容だが、電気ショックについては中々難しいので高校ではないかという議論がある（野津）
 - 学力が一定以上であれば可能かもしれないが、中学校で全員が「除細動」という文言は難しいのではないか？AEDの原理を理解することは難しいのではないか？
 - 学校教育以外では心肺蘇生については100の知識より1の技能が重視される。学校教育の「科学的」というところでどのように味付けをするのか。が大切。（坂本）
- ・
- ・ AEDの位置づけをはっきりしたほうが良い。（野津）
 - 小・中・高のすみわけを意識すると、AEDの原理を記載しても良いと考える（石見先生）
 - 教員プログラムにはAEDの原理を教えることは重要（野津）

- ▶ あくまで胸骨圧迫のメカニズムを教え、AEDについてのメカニズムはブラックボックスで良いのではないか？（坂本）
 - AED⇒電気ショックをすると体がびくっとするなど、電気を流すとどうなるのかがわかるのは容易と思う
 - 科学的というより根拠。なぜ、こういうことが起こるのか
- ・ 除細動の有無を話すとAEDの仕組みは言わざるをえないのではないか？（名知）
 - ▶ 心静止などの説明の必要はない
 - ▶ 高電圧の電気をながし、効く場合と効かない場合があるということをいうくらいで良いのではないか？（坂本）
 - ▶ そもそも、心臓に電気を流すとなぜ心臓が動き出すのかわからないのでブラックボックスで良いのではないか（野津）
 - 授業は2時間しかないので、どこを焦点化するかを考える必要がある
 - 教科横断的な立場では、総則評価の付録に一覧表が掲載されている。電気や心臓を学ぶ学年について念頭に入れていないと足元をすくわれる。
 - ・ 電気：小4～小6、心臓：小6
 - ▶ 中学校までが義務教育なので、メカニズムもミニマムは入れておいた方が良いのではないか。（西山）
- ・ AEDの地図作り ⇒ 小学生の方に入れられないか？（石見）

西山

対象：高等学校 第1学年

単元名：応急手当

時間数：3コマ

内容：

- ・ 中学校までに学んだことの発展の内容。
- ・ 社会の中で、自分に何ができるのかということを考えてもらう。
- ・ 人工呼吸は時間の関係により希望者のみ実施

平籠

対象：高等学校 第1学年

単元名：応急手当

時間数：3コマ

内容：

- ・ 3時間分を作成
- ・ 学校へのBLS導入委員会を参考。
- ・ バイスタンダーとして正しく実施できる。救命でリーダーシップを取れることが目標。
- ・ 1時間目：応急手当の意義を理解（モチベーションの向上）
- 2時間目：実習。PUSHコースを行う。
 - ▶ メッセージビデオの視聴。
 - ▶ 人工呼吸はアドバンスとして学ぶ。
 - ▶ チェックシートを使って生徒同士で評価を行う。
- 3時間目：グループ討議。救命できなかった学校の事例を知る。AEDが近くにあっても使用しなかった例や海外のAEDの設置状況について。

高等学校指導案（製作者：関・西山・平館）についての質疑応答

- ・ 授業単元は『応急手当』、時間数は『3時限』でよいか？（立川）
 - 勤務校では応急手当の単元に3時限を当てている。（平館）
 - （5）安全な社会生活の応急手当が3時間なのか、保健の3時間なのかによって意味合いが違ってくる。安全な社会生活のヘルスプロモーションの中であればよいと思う。（野津）
 - ➔ 平館先生の指導案は、安全な社会生活に位置付けると技能の時間が確保できる
- ・ 高校保健の教科書は1社独占状態。大修館が2種類出している。（野津）
 - 高度なものと簡易的なものがあり、これではほぼ8割を占める
 - 監修：坂本先生
- ・ 学習指導要領の通り、心肺蘇生・AED・人工呼吸・その他の応急手当が含まれている⇒イメージとしては3時間位と考えている（坂本）
 - 協力するの文言を含める。（立川）
 - 学習指導要領＝関先生の単元。ここに複数で行うという文言を含めたほうが良いのではないか。時間については3時間が妥当。（村井）
- ・ 授業時間の割り当ては応急手当で半分、心肺蘇生で半分を使っている学校が多いのではないか（村井）
 - 心肺蘇生：複数人数、胸骨圧迫を優先して触れるようにする。
- ・ 実技：救急体制を適切に利用することを理解する。複数人数で対処することが有効なこと。気道の確保、人工呼吸ができるまでが教育目標となる。（坂本）
 - 学習指導要領の解説ではそう書いているので、教科書としてもそれに従わざるを得ない。
 - どのような形の実習で実現するかレベルは実際の現場での判断となる
 - 人形があるので、映像ではなくデモだけでも良いので実際にやってみせることが必要。（村井）
 - 人工呼吸は風船を使うという発想もあり。（野津）
- ・ 中学校と高校のすみわけをするために、「複数で行うこと」を示した。（野津）
 - 触れることにする：教師が話すだけでも触れたことになる
 - 理解できるようにする：1時間しっかり時間をかけて行うべき事項
 - ➔ 複数は「触れるようにする」
 - 人工呼吸は扱って欲しい、胸骨圧迫は中学校バージョンで良い
- ・ 失敗例がもっと見せられると良い。（野津）
 - 考えさせる。調べさせる。話させるなどを考えられる資料
- ・ 人工呼吸をスキルとすることは医療者としても難しいと考えている（名知）
 - 人工呼吸を学ばせるには気道確保が必須＝消防や日赤に依存する話に戻ってしまう
 - 人工呼吸のスキルを実践するという話をもとに作ると完結しないので、デモンストレーション（教師が行う）や動画を利用するとなるのではいか
 - 考えさせることが入っていればよいのであれば、失敗例や実際の症例をだせばよい

のではないか。

- 全員が練習してとなると機材的な部分が最大のネックとなるのではないか
 - 人形については、埼玉県は高校に1体は少なくともあるのでデモンストレーションは可能。(村井) (→配置後の更新はそれぞれの学校で行っているため、使用できる人形がすべての学校にあるとはいえないことがわかった)
 - 岐阜県は消防が回る際に消防の持っている機材を持ってきてくれる。県や市が貸出用のもので用意できそう(名知)
 - 千葉県の公立高校では地域をブロックに分けて複数校で人形を使えるように公費で用意しているが、私学の場合は人形の用意が困難。(平館)
- ・ 人形が必須というよりは人工呼吸の手技があることと皆でやることのメリットが伝わればよいのではないか？(石見)
 - 胸骨圧迫＝あっぱくん、人工呼吸＝教材がないのであればJKKで作るべき(坂本)
 - ミニアンは人工呼吸可能 ⇒ 予算確保が出来ない時に使いまわしをされたことがある ⇒ 衛生上NG。教育プログラムを変更した(名知)
 - お面の裏に風船がくっついているようなものでよいのではないか？感染の問題があるので基本的にはパーソナルなもの(坂本)
 - 気道確保の手技についてはDVD。さらに詳しくやるなら人形で。みたいな段階式しかないのではないか(坂本)
 - 気道確保 ⇒ 舌根沈下がわかるモデルがある。人形にやらなくても大丈夫
 - 気道確保 ⇒ 頭部後屈顎先挙上を自分自身でやるというのでもあり
 - 生きてると舌根沈下は体験できない(石見)
 - 人工呼吸＝気づきに徹してデモなりDVDなりにしてよいのではないか？
 - 人工呼吸の位置づけを明確にする。違ったメッセージが届かないようにする
 - 横断的な指導方法に入れるくらいが良いのではないか(本間)

4) グループディスカッション(各班発表)

高等学校

- ・ 授業内容の構成
 - 時間数：3コマ
 - 1限目 講義として応急手当意義日常的な応急手当基本について時間を使う
 - 2限目 実習として メッセージビデオ、救援依頼、胸骨圧迫、AEDの使い方
 - 3限目 導入(復習)アルゴリズム確認
 - ・ シナリオ2パターン
 - ① 電気ショックあり
 - ② 電気ショックなし
 - ※適用のない不整脈 溺死 窒息 人工呼吸の重要性の話
- ・ デモンストレーション 教員・生徒 できない場合はDVDで行う
- ・ グループディスカッション 救命率向上のために何ができるかブレスト
- ・ 個人でワークシートに記入し評価を行う。

中学校

- ・ 基本構成
 - 単元：傷害の予防
 - 時間数：2コマ

- ・ 導入
 - 野球で倒れた映像 そこから何が出来るかグループワークを行う
 - 持久走など多いケースにしたほうが良いのではないか。
 - AEDの理論

- ・ 2限目 具体的に胸骨圧迫AEDの使い方の実習 振り返り

小学校

- ・ 導入
- ・ 自宅で父親が倒れて子供母親が発見。母が110番、子供AED持ってくる。
 - 救急車が来て助かる。ハッピーエンド。
 - 救命事例として倒れる瞬間に傷病者と一緒に居たほうが良い。
 - 大事な人が急に倒れた時にどういう行動をとるか考えてもらう
- ・ 傷病者が見知らぬ人だった時の場合、危険な場所だった時のケースを考えさせる。
 - 見知らぬ人の時家族ほどの行動が取れなくても大人を呼ぶなどできるのではないか。
- ・ 時間があれば胸骨圧迫の指導を行う
- ・ まとめ 今、自分が出来る事を考える。
 - 家の近くのAEDをさがすなどの次に繋がる宿題というかまとめができれば。
- ・ 体育的な要素が無くなっていくので、総合的な学習の時間になるのか？特活になるのか？を詰めている。
- ・ 一連の流れを見せてディスカッションではないほうがよいのでは？
 - 前半部の見直し
 - 最初にビデオを見せてしまっは、その後の問いかけが成り立っていないように思える
 - 技術的な話に持っていく際に家族とかになるので、後の方が良い
- ・ 勇気を持つとうということ教えるには、なぜ行動に移せないのかを学ばせないといけない。
 - まちなかでひとが倒れた、みんなが見てる、吹き出しを頭でそれぞれがどんなことを思うか子供に書かせる。どうした？AED？関係ないよ？困った？急いで？などブレストする。
 - ワークシートの用意
 - 小学生でも出来ることを考える。

まとめ

- ・ 代表的な指導案をまずは一本作って、教材を作る

次回、10月14日10時～

メンバー：岸平（ファシリテーター）・坂本・立川

事務局：小栗・宮崎（議事録）

- ・ 想定教科：総合的な学習の時間、特別活動、保健体育領域
 - ・ 目標：
 - ▶ 胸骨圧迫とAEDを学ぶことで、人を助けることができるという知識をつけ、その上で自身の役割を考える
 - ▶ 大人になるまでにできることを増やしていく。
- ※「勇気」をもつというのが目標で、勇気をもってやりましょうでは、勇気がないことが前提になってしまう。人を助けるためのステップを学び、高校生くらいになれば、勇気がなくてもみんなができるようになっていくことが理想。

・ 導入部分：

- ① 知っている人（家族）が倒れる
勇気のあるなしではなく、大事なひとが倒れたという場面で何をするか考える。など
※倒れている人の表現は重要。倒れている人のほとんどが心停止というわけではない。そのため、目の前で倒れた人というのが必要。
- ② 知らない人が倒れる
状況判断として必要な、周囲の確認や知らない人に接する際のリスクを考える。など
- ③危険な場所で人が倒れる（車通りの多い道路など）

<想定教材>

- ・ 助かったパターン／助からなかった場合の動画
※学校保健会の動画（参考URL：<https://www.gakkohoken.jp/aed>）は優れている。小学生、中学生、高校生でやることがわかる。

・ 展開部分：

- ① 導入のような状況下で自分だったらどうするかを考えさせる。
 - ▶ どのような行動があるか考えるパターン
 - ②導入のような状況下に遭遇したこどもがどのように思っているかを考えさせる。
 - ▶ そういう場面に遭遇した時に自分ならどう思うか考えさせる。
- ※場面と吹き出しの画像などでイメージさせる。

・ 実技について：

ありとなしのパターンで指導案をつくる。
※理想は入れたい。導入からの展開を踏まえ、構成していく。

・ まとめ部分：

一連の流れを知ること、自分に何ができるかを知る。
AEDに関心を持ち、近くのAEDの設置場所に興味を持つという行動につなげる。

- ・ 今回の結果

現状で指導案としてまとめきれなかったため、持ち帰り導入展開を再考となる。

そこから理想形の授業展開を踏まえ、再度検討を行う。

※どこまでの教材を初期セットとして捉えるか要検討（胸骨圧迫や疑似AEDなどの教具）

- ・ 冒頭ディスカッションにて

きちんとしてやり方を教えるとかではなく、心停止や胸骨圧迫、AEDというのを知ってもらうためにはまずは、導入で一連の流れ動画で見せる方が現場としては、受け入れやすいのではという議論があり、そこから構成に向けた話し合いが進みました。

※上記の議事録文はディスカッション時間を超えた分を含め総括した内容を記載しています。

- ・ 野津先生より

冒頭にすべてみせてディスカッションでは、答えを知っているので成り立たない。勇気を持つための議論をさせるための資料はなんでもいい。

こういったこと（嫌なこと・ブレーキがかかること）があるから、できないことが多い。

でも、それを乗り越えてやらなきゃいけない。そうやって大人になっていくことを学ぶ。

メンバー：岡野（ファシリテーター）、石見、白川

事務局：山中（議事録）

●指導案の骨子をまとめる

- ・令和3年の新学習指導要領案に準じていく必要がある

>保健体育科

本時の目標：傷害の防止（P.219 4つのうちの（3）【2時限】）

傷害の防止について、課題を発見し、その解決を目指した活動を通して、次の事項を身に付けることができるよう指導する。

ア 傷害の防止について理解を深めるとともに、応急手当をすること。

（ア） 交通事故や自然災害などによる傷害は、人的要因や環境要因などが関わって発生すること。

（イ） 交通事故などによる傷害の多くは、安全な行動、環境の改善によって防止できること。

（ウ） 自然災害による傷害は、災害発生時だけでなく、二次災害によっても生じること。また、自然災害による傷害の多くは、災害に備えておくこと、安全に避難することによって防止できること。

（エ） 応急手当を適切に行うことによって、傷害の悪化を防止することができること。また、心肺蘇生法などを行うこと。

イ 傷害の防止について、危険の予測やその回避の方法を考え、それらを表現すること。

単元の目標

ア. **知識及び技能**（P.220（エ））

心肺停止に陥った人に遭遇したときの応急手当としては、気道確保、人工呼吸、胸骨圧迫、AED（自動体外式除細動器）使用の心肺蘇生法を取り上げ、理解できるようにする。

イ. **応急手当の実際**（P.221）

実習を通して胸骨圧迫、AED（自動体外式除細動器）使用などの応急手当ができるようにする。心肺蘇生法を包帯法や止血法として直接圧迫法などを取り上げ、**実習**を通して応急手当ができるようにする。

イ. **思考力、判断力、表現力等**（P.222 3つ目）

傷害に応じた適切な応急手当について、習得した知識や技能を傷害の状態に合わせて活用して、傷害の悪化を防止する方法を見いだすこと。

心肺停止に対する適切な応急手当について、習得した知識や技能を傷害の状態に合わせて活用することができる。

50分x2限の検討

> 1 限目：

導入：DVD「アスカモデル」や野球などの同世代の子が倒れた部分までを流す（倒れたところまで）

課題：倒れた人を見つけた時にどうするのか？

展開：まずは個人で考える⇒グループワーク

AED理論、胸骨圧迫の知識（安全確認から）、救命曲線、メカニズム

まとめ：実際に何ができるか？を考え、次回のコマへ繋げる

> 2 限目：

導入：前回の振り返り

課題：人の命はしっかり救えるのか？

展開：実習 心肺蘇生法の手順、周囲の状況の観察、意識確認、応援要請、呼吸の確認、胸骨圧迫、AED、⇒最後にDVDで助かったシーンを流す

まとめ：大事であることを理解した上で知識と技術と人を助けたいという気持ちがあれば救える命があることを理解させる。

今後、具体的な教材の検討へ

●野津先生アドバイス

・シチュエーションは「野球」よりも事例が多いものを導入時のDVD映像にするのが良い、要検討。

⇒マラソン（アスカモデルもそうであった）

メンバー：平舘（ファシリテーター）、名知、西山、村井
事務局：中嶋（議事録）

- ・ 目標は大体良い。複数人数についての記載を追記する（名知）
- ・ 人工呼吸は触れる程度（村井）
 - 教科書に沿うと、
 - 2時間目：捻挫骨折の応急手当
 - 3時間目：人工呼吸
 - 教科書に合わせた指導案にすることが大切
- ・ 授業の構成
 - 応急手当についての講義1時間 ⇒ 実技
 - 講義と実技をサンドイッチ形式にするのも大いにあり
 - 教師が授業の順番をアレンジすることもある
 - 指導要領に忠実に言う
 - 実習のみで終わらず、最後にブリーフィングの時間を設ける
 - まとめつつ次（高校卒業後）にもつながる授業とする。
 - 溺水時の人工呼吸の有効性を伝える
 - 初めて講義する先生も指導案を見たら授業ができることが目標
 - 実習は教室ではできないため、2時間体育館を使用することは厳しいため集中して1時間で済ませたい現状がある。
 - 教室でプロジェクターを見る程度であれば2時間の実習も可
 - 教材と指導案のセット販売は、教室で実施できることが強みとなる（西山）
 - ・ 胸骨圧迫＝あっぱくん ⇒ 机上で実施可
 - ・ AED = 擬似AED ⇒ 机上で実施可
 - ・ 人工呼吸 ⇒ 今後の課題
 - 人工呼吸を組み込んだ授業は無理。外部機関を使っても全員の体験は難しい。紹介と理解で手一杯である。胸骨圧迫とAEDだけでは助からない場合もあることを理解してもらい入り口までの説明で良いのではないか？（名知）
 - 指導要領に入っていないながら人工呼吸のスキル練習が入っていないのは、先生としてどうなのか？（西山）
 - 一部分の実習でも理解できればよいのではないか？（村井）
 - ガイドラインでやらなくても良いことになっている人工呼吸の重要性が上がってしまうのではないか（名知）
 - 必要性和方法を伝えることで良い（村井）
 - 内容的には中学生と同様となり、そこに複数人数的な要素を導入する（名知）
 - DVDの内容は中高一緒で、最後にオプションで人工呼吸を加える
 - シミュレーション：チームで行う
 - 展開例：学校内の〇〇で傷病者が発生したという想定
 - どのような場所で実習を行っても全員が胸骨圧迫出来る教材と共に行う
 - 時間は3時間といいつつ50分でも厳しい現状にある。アレンジについては学校の判断に任せる。

- 中学校でやったからと言って、丁寧なやり方を飛ばしシナリオだけ行う方法もあるが実際は中学に習ったことを思い出せない。
 - 指導案について
 - 3時間の内容で作成する（このくらいは必要というメッセージ性を含め）
 - 授業で行い、さらに発展的な内容を特別活動で行うことはあっても、特別活動を補完として授業を省略することは出来ない
 - 1時限 基本的には応急手当の基本、日常的な応急手当を入れる。理解をさせる。
 - 動機づけ：メッセージビデオ
 - スライドをカットし、1時間目に当て込む
 - 教員による人工呼吸のデモを行う
 - 2時限 実習 プッシュコース ビデオで意識 AEDの使い方まで。
 - 3時限 人工呼吸の実習教員のデモか生徒数名で実際に それができない場合はビデオ動画※最後が良いか？
 - シナリオでケース2つ人工呼吸のはいったものをグループで実習。
 - 電気ショックが必要なシナリオ、必要ないシナリオ。
 - 3時限も導入が必要
 - 人工呼吸を行うシナリオ 行わないシナリオ
 - ワークシート 振り返りなど考える時間。
 - まとめ：救命率向上のためにという話をする
 - 1週間に1時間なので忘れる。導入重要。
 - フローチャートで手順示す。裁量的な部分もあるかと思うがわかりやすい。
- 評価基準については2020年3月に評価基準が発表される。
 - 来年の今頃に新しい教科書が発表される
 - 現在の応急手当についての評価を取り入れ、新しいものが発表されたらマイナーチェンジを行っていく
- 指導案は現状でいいものではなく、きちんとしたものを出す
 - 指導者によるばらつきがないようにする
- 参考資料としてチェックリストはあってよい
 - 関先生の指導書に入っている内容をもっと大雑把な内容にしたもの
 - このまま使えるというチェックリストは授業の際ありがたい
 - 評価基準が明らかになったらワークシートを変え、それを評価に使えるようにできる
- 胸骨圧迫がしっかりできるように、複数台の人形が学校にあるのが理想。トップダウンで。
- 救命できなかった事例はDVDに収録する。
- 場合によってはディスカッションをしてからワークシート。

- ・ ドラフト版を載せておいてパブコメを行う。
- ・ 4限目を取りに行っても良い。
- ・ 海外事例を提示するのであれば、善きソマリア人法。公民と絡めて授業を行うのが良い。
- ・ 数字の読み方、リテラシーも絡めて勉強できれば広がる。

- ・ シナリオ シチュエーションの決定
 - チームを学ばせる。駅に行く途中に遭遇した。
 - 3限目の目的は協力。学外で知らない人が居たときの設定。
 - 周囲を巻き込んで対応。
 - 通学时誰かと一緒にいる場面。一般市民もいる。
 - 通学途中、駅までの道、心室細動じゃないパターン。
 - 学校内？学校外？部活動もキーワード。遠征中。図書館。

- ・ シナリオ1 電気ショック必要
 - クラブ活動、遠征、試合に言っている。

- ・ シナリオ2 電気ショック不要
 - 夏休み、友達と海に行っている。

- ・ 2限目のPUSHプロジェクトはボジョレーを人に置き換える。
 - 高校生バージョンで作る。その際のシチュエーションを設定する。

- ・ 単元目標は関先生の物を活用する。
- ・ 救急車の適正利用。安易に救急車を呼ばない。

- ・ 関先生、西山先生、名知先生でシナリオを作る。
 - シナリオは状況設定くらいで良いのでは。
- ・ ワークシート作成を村井先生。
- ・ 指導案を平舘先生。様式はこの後送られるものを使用。
- ・ 8月31日までに一度出し合う。

- ・ 1時の部分で量が適切か、応急手当をどこに盛り込むか。
 - 心肺蘇生だけでなく日常的応急手当、捻挫、骨折など全部盛り込むと時間が足りない。
 - 代表的なものとして、熱中症、捻挫が教科書にはのっている。
 - 50分で心肺蘇生まで。メインはこっち。

- ・ 呼んでも誰も来なくて1人でというシチュエーション。
 - 救命講習で、もし一人だったら何をすればよいか？という質問が出る。

- 協力するという観点から、みんなでのシチュエーションで、一人のときは口頭での説明。

- たたき台を作って、全員で共有。
- メッセージビデオはPUSHの既存のものを使用。

- チーム蘇生のビデオが必要。
 - 複数人で蘇生を行う。中学とはかぶらない。
 - 海、プールだとライフセーバーや監視員がいる？